

## 第5回日本館基本構想ワークショップ議事録

■日 時：2021年1月29日(金) 10:00～12:10

■参加者（五十音順）：

市原 えつこ氏（メディアアーティスト）、指出 一正氏（株式会社 sotokoto online 代表取締役/ソトコト編集長）、佐藤 オオキ氏（デザインオフィス nendo 代表/デザイナー）、塩瀬 隆之氏（京都大学総合博物館 准教授）、太刀川 英輔氏（NOSIGNER 代表/デザインストラテジスト/慶應義塾大学特別招聘准教授）、田中 みゆき氏（キュレーター/プロデューサー/東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員）、平賀 達也氏（ランドスケープアーキテクト/株式会社ランドスケープ・プラス 代表取締役）、平田 晃久氏（建築家/京都大学教授/平田晃久建築設計事務所）、南澤 孝太氏（慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 教授）

■議事概要：各参加者からの主な意見は以下のとおり。

（基本構想案等に対する意見）

- 境界が無く、何か不完全なものの群のようなものが関わりあいながら新しいまとまりを生んでいるという内容が盛り込まれていて良いと思った。
- 運営にもダイバーシティを取り入れるのは重要である。
- デジタル技術を何のために使うかという目的がいろんなところに散りばめられていることが良かった。
- 不完全であることを肯定するところがとても良く、ダイバーシティの考え方につながる。不完全性や多様性を強調することでいろんな生き物の幸福につながっていくのでは、ということがまとまっていた。
- 「完全無欠ではない」と弱さをはっきり明示的に書いているということに 2030 年、2050 年に向けての力強さを感じた。

（基本構想案を社会に浸透させるための仕掛けづくりなど、日本館一般に対する意見）

- 絶えずにオンゴーイングに続けていくということをどう持続できるかを念頭に置いて、議論できる場を作ることがまず大事なこと。大きく打ち上げるというより、万博や社会の気風を伝えていくための機会を、日本の各地で絶えず開催していくというのが重要なのではないかと思う。

- 様々なフィールドで活躍されている方それぞれにとって関係のある万博になる必要がある。「自分も万博に関われるのか」と思ってもらえるように関わりしろをうまく設計していけるといい。
- 日本館が、様々な分野のプレーヤー同士が繋がれるハブになることが非常に重要。口コミで広まっていった繋がりが広がっていくという形もいいと思う。
- ファーストコンタクトとして、どうすれば万博について広くポジティブに受け止めてもらえるか？大事なものは議論や検討の過程を透明化し、平易な言葉でオープンにすることではないか。
- 様々なプレーヤーとコミュニケーションを取って生まれたアイデアや人の繋がりを日本館の展示や運営に活用できればいい。
- 今の 2021 年時点の技術で展示を考えると本番のときに古い技術になってしまう。技術の進化を予測しつつ、どこかでフィックスして進めていくにはどう連携すればいいのか難しい調整になる。
- 手段は進化するが目的は進化しない。展示を考える時に HOW（手段）ではなく、WHY（目的）のレイヤーで検討することでブレないものが作れると思う。
- 日本館を運営のダイバーシティのモデルケースにしていきたい。
- リアルとバーチャルの融合の具体化として、実際に来られない人たちにどのような体験をしようか。
- リサイクル、リユースの観点では、先に日本館の会期後の受け入れ先を決めておいて、その受け入れ先のニーズも踏まえつつ日本館を設計できれば、リサイクルによってゴミを出さないということも実現できるのではないか。